最近の森林性鳥類の住宅事情

－巣箱の利用状況より－

写真－1　巣箱で繁殖するキビタキ

当センターの体験の森に春が訪れると、たくさんの夏鳥たちが、新しい命を生産するためにこの森にやってくる。中でもキビタキの密度は県内の同様な森林と比べてかなり高く、毎年たくさんの個体が繁殖している。この鳥は 2004 年の繁殖期には、当センター展示館前のアカマツの枝と葉が重なり合っている塊りの中に営巣し、2005 年には林内の桜の枯れ木にコゲラが掘った穴の中で繁殖した。片方は樹枝上、もう一方は樹洞に作られた巣であった。２つの巣場所があまりにも違うので、図鑑で調べてみると、「巣は樹洞や茂った葉、つるの間などに枯葉や細根などで椀型の巣を作る。（日本の野鳥山と渓谷社）」と、ここでの観察と同じことが書かれていた。また、その続きに「前の開いた巣箱をかけると利用することがある。」とも記載されていた。そこで、このような巣箱をかければキビタキが利用するに違いないと考え、端材を使って巣箱を作り、林内にかけてその利用状況を調べた。

写真－2　前開き巣箱

この調査は 2005 年に 6 個の巣箱をかけ、次の 2006 年にはそこに 9 個を加えた計 15 個の巣箱で行った。巣箱は、一般にカラ類用として使われている巣箱から前板を取り外した前開きの形にした（写真－2）。その巣箱は約 9 haの森林内に 50~100m 間隔でランダムに設置した（右図）。

巣箱の設置場所

２年間の結果は表－１の通りであった。このようにどちらの年も架設数に関係なくキビタキは４個の巣箱を利用した。これ以外の自然巣としては 2005 年に枯れ木に作った巣を１個発見しただけなので、ここに生息するキビタキは多くても 5~6 つがいと考えられ、そのほとんどが巣箱を利用したことになる。このことは林内に巣場所にふさわしい場所が少ないことを物語っているといえる。つまり、ここにはキビタキに営巣場所を提供できる裂け目や穴のある枯れ木が少ないことが関係しているのであろう。

表　1　体験の森における前開き巣箱の利用率

		2005年	2006年
架設数		6	15
利用数	キビタキ	4	4
	オオルリ		1
利用率（%）		66.7	33.3

写真－3 巣箱のシジュウカラ

このことは、当調査地に設置したカラ類用の７個の巣箱すべてがシジュウカラやヒガラ・ヤマガラに利用された結果からも明らかである。つまり、森に棲み樹洞を利用して子育てを行う小鳥たちの世界に、住宅難という社会問題が起きているのではないかと心配される。

森は樹木だけでなくほかの植物や動物たちと深い関係を保ちながら生きていることから考えたとき、たとえ木材として用を成さない枯れ木であっても、それを何とか残してやるように心がけていきたいものである。（林業総合センター　森林学習展示館　大原　均）

※平成１８年度のカラマツ林業研究会は、平成１９年１月１１日に行われました。